

二〇一六年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

第3問 古文 『今昔物語集』

〔出典〕

『今昔物語集』は、平安時代後期（一一二〇年頃か）成立の説話集。作者については源隆国説などがあるが未詳。天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）の説話を一〇〇〇話以上収めている。全三十一巻（内三巻を欠く）で、今回出題されたのは、巻第十六・第三十二「隠形男依六角堂の観音助顕身語（隠形の男、六角堂の観音の助けに依りて身を顕はせること）」の、最初と最後の数行を省いた主たる部分（全体の八割に相当）である。受験生が知っておきたい説話集には、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『十訓抄』『撰集抄』『沙石集』などがあるが、『今昔物語集』は、それらの中でも最も有名なものである。

近年、センター試験本試験の古文の問題は、平安時代の物語・鎌倉時代の擬古物語・江戸時代の仮名草子など小説類からの出題が多かった。説話的文章と言える作品の出題は、近世の作品でいくらかはあったが、いわゆる説話集と呼ばれる作品からの出題は、センター試験が始まって以来、本試験としては初めてのことである（追試験では一九九一年度に『閑居友』、一九九七年～二〇〇五年に設けられていた国語Ⅰ試験では、一九九七年度本試験に『今昔物語集』、二〇〇一年度追試験に『三宝絵詞』などが出題されている）。

本文字数は、昨年度と比べて五百字ほど多いが、内容はたいへん読みやすいものとなっている。牛飼は、最終部で、姫君を苦しめる手伝いを男にさせようとしている。観音の使者として、直接的に男を助けるために現れたわけではなかったのである。験者の般若心経を聞くと、牛飼は姿を消し、男の衣が燃え始めて、その姿が露わになる。般若心経によって、姿が元に戻ることを知っていた観音が、男をここへ導いたということなのである。最終部のこの展開はやや複雑だが、長い本文をここまで十分に読み切れれば、問5・問6などにも自信を持って正解できるはずである。

〔通釈〕

男が、「もはやこれまでだなあ」と思っている時に、一人の鬼が、走って来て、（橋の下に隠れていた）男を捕まえて引き上げた。鬼どもが言うには、「この男は、（たいして）重い罪がある者でもないだろう。許してやれ」と言って、鬼は、四、五人ほどで男に唾を吐きかけては皆通り過ぎて行った。

その後、男は、殺されずにすんだことを喜んで、気分がわるく頭が痛いけれども、我慢して、「早く家に行って、さきほどの様子を妻に話そう」と思っ
て、急いで行って、家に入ったが、妻も子も皆、男を見るけれども一言も声をかけない。また、男が、何か言いかけても、妻子は、返事もしない。そこで、
男は、「なんということだ」と思って（妻子の）近くに寄つ（てみ）たけれども、そばに自分がいるのに（妻子は自分が）いるとも気づかない。その時に、
男が、合点して思うには、『なんと、鬼どもが私に唾を吐きかけたことよって、自分の体は見えなくなつてしまったのだ』と思うので、この上なく悲し
い。自分が人を見ること（ができるの）は以前のままである。また、人が言うことも問題なく聞くことができる。（なのに、）人は自分の姿を見ることがで
きず、声を聞くこともできない。だから、人が置いた物を取つて食べても、人はそれに気づかない。このようにして夜も明けたので、妻子は、男のことを、
「昨夜、人に殺されてしまったようだ」と言つて、この上なく嘆き合つていた。

そうして、数日経つたが、（男は元に戻れず）どうしようもない。そこで、男は、六角堂に参籠して、「観音様、私をお助け下さい。長年お頼り申し上げ
て参詣いたしました御利益として、元のように私の姿を見えるようにして下さい」と祈念して、参籠していた人の食べ物や寺に寄付した米などを取つて食
べていたけれども、そばにいる人は、気がつくこともない。こうして十四日ほど経つた頃、夜寝ていると明け方の夢で、（観音様の周りに垂らしてある）
御帳の辺りに、尊そうな僧が出てきて、男のそばに立つて、告げておっしゃるには、「お前は、早々に、朝のうちにここから退出して、最初に会つた者の
言うことに従いなさい」と言う。このように見るうちに、（男は）夢から覚めた。

夜が明けたので、（六角堂から）退出すると、門の所に牛飼の童でたいそう恐ろしげな者が、大きな牛を引いているのに会つた。（牛飼が）男を見て言う
には、「さあ、あなた、私と一緒に（いらつしやい）」と言う。男は、これを聞くと、「自分の姿が見えるようになった」と思うので、嬉しくて、喜びなが
ら夢（で見た観音のお告げ）をあてにして牛飼の童について行くと、西の方に十町「約一・一km」ほど行ったところに、大きな屋敷の門がある。門が閉
じていて開かないので、牛飼の童は、牛を門につないで、扉の隙間で人が通ることもできない所から入ろうとして、男を引っぱつて、「お前も一緒に入れ
」と言うので、男が、「どうしてこの隙間から入れようか」この隙間からは入れないだろう」と言つと、牛飼の童が、「とにかく入れ」と言つて男の手を
取つて引き入れるので、男も一緒に（屋敷の中へ）入つた。見ると、家の中は広くて、人が、たいへん大勢いる。

牛飼の童は、男を連れて板張りの間に上がつて、部屋の内へどんどん入っていくが、「何なのだ」と見とがめる人は誰もいない。ずいぶん奥の方まで
入つて見ると、姫君が、病に苦しみ煩つて寝ていた。（姫君の）足元と枕元に女房たちが並んで座つて姫君を看病している。牛飼の童は、そこに男を連れ
て行って、小さな槌を渡して、この病気の姫君のそばに座らせて、（姫君の）頭を打たせたり腰を打たせたりする。その時に、姫君は、頭をもたげて朦朧
としてこの上なく苦しむ。そのため、（姫君の）両親は、「この病は、もう限界のようだ」と言つて泣き合つていた。見ると、経を唱えて勤行し、また、尊
い験者を迎えに行かせたようである。しばらく経つて、験者がやって来た。（僧は）病人のそば近くに座つて、般若心経を読み上げて祈ると、この男は
（これを聞いて）、この上なく尊く感じた。（その神威に接して）たいそう（体がこわばり）ぞつととして、なんとなく寒いように感じた。

そうしている間に、この牛飼の童は、この僧をちょっと見るとすぐに、ひたすら逃げに逃げてどこかへいなくなってしまった。僧は不動明王（火界）に「煩惱や災厄を烈火で焼き尽くす炎の世界」に住すと言われる（の力によって災厄をはらう呪文を読み上げて、病人に対して加持祈禱すると、男の着物に火がついた。（着物が）どんどん焼けるので、男は、声を上げて叫ぶ。すると、男（の姿）は、丸見えになった。その時に、その家の人が、姫君の両親をはじめとして女房たちも見ると、たいそうみすぼらしい姿をした男が、病人の傍らに座っている。驚いて、すぐに男を捕まえて、（部屋から）引っぱり出した。「これはどうしたことか」と（その家の者が）尋ねると、男は、事情をありのままに最初から話した。人は皆これを聞いて、「聞いたこともない」不思議なことだ」と思う。そうするうちに、男が、姿を現したところ、病人は、きれいさっぱりぬぐい取ったかのように快復した。そのため、一家をあげて喜び合うことはこの上ない。

その時に、祈禱していた僧が言うには、「この男は、とがめられるような罪がある者でもない。六角堂の観音様の御利益をいただいた者である。ですから、すぐに許しておやりなさい」と言ったので、外へ追いやって逃がしてやった。さて、男が、（自分の）家に帰って、事情を話したところ、妻は、「驚いたことだわ」と思いながらも（夫の無事な帰宅を）喜んだ。

例の牛飼の童は神様の従者であったと言う。誰かの頼みによって、この姫君に取り憑いて苦しめていたということである。

「解説」

問1 解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、前書きなどや前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 基礎

「念じて」の解釈として最も適当なものを選べ。

「念じ／て」と単語分けされる。「念じ」は、サ変動詞「念ず」の連用形。現代語で「心に念じて」などと言うのと同様に、古文でも「祈る」の意を示すことはあるが、「我慢する」の意が問われやすい動詞である。単語の意味から見て、正解は、②「祈願して」か、③「我慢して」に絞られるが、直前の「心地違ひ頭痛けれども（気分が変で頭が痛いけれども）」や、直後の「『とく家に行きて、ありつる様をも妻に語らむ』と思ひて、急ぎ行きて（『早く家に行つて、さきほどの様子を妻に話そう』と思つて、急いで行つて）」との意味のつながりを考えると、③「我慢して」が適当である。よっ

て、正解は⑤である。単純な、単語の意味の問題である。

(イ) 標準

「いかでかこの迫はさまよりは入らむ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いかで／か／この／迫／より／は／入ら／む」と単語分けされる。「いかで」は、「どうして・どうやって」、もしくは、願望(希望)・意志の表現と呼応して「何とかして・どうにかして」と訳す副詞。「か」は、疑問・反語の係助詞。「迫(はさま)」は、「隙間・間」の意の名詞。「む」は、推量(〜だろう)・意志(〜しよう)・婉曲(〜ような)・適当(〜するのがよい)等の助動詞だが、強意の助動詞「ぬ・つ」や疑問・反語を示す表現(ここでは「いかでか」とともに使われる時には、可能性の推量(〜できるだろう)の意を表すことがある助動詞である。

よって、傍線部(イ)は、直訳では、

- (i) 「どうやってこの隙間から入るのだろうか」
 - (ii) 「どうやってこの隙間から入ろうか」
 - (iii) 「どうしてこの隙間から入るのだろうか」
 - (iv) 「どうにかしてこの隙間から入ろうか」
 - (v) 「どうしてこの隙間から入るだろうか、いや、入らない(入るつもりはない)」
 - (vi) 「どうしてこの隙間から入ることができだろうか、いや、入ることはできない」
- 〓 選択肢③がこれと同意。
 〓 選択肢①がこれと同意。
 〓 選択肢⑥がこれと同意。
- などと訳されることになる。選択肢②と④の意味にはならない。

ところで、傍線部(イ)の直前には、「扉の迫の人通るべくもなきより入るとて、男を引き、『汝もともに入れ』と言へば」とあり、これは、「扉の隙間の人が通ることもできない所から入る」ということで、「男を引っぱって、『お前も一緒に入れ』と言うので」という意味である。助動詞「べし」「べく」は連用形)は、このように否定文内で使われている場合には、可能を表していることが多いのである。

つまり、男が牛飼に導かれて通ろうとしているのは、人が通れそうにもないような扉の隙間なのであるから、傍線部(イ)で男が言うこととして最も適当なのは、「こんなに狭い隙間からは入れない」ということである。よって、正解は⑤。「入りたくない」(①)とか「入りたい」(③)という、男の気持ちを惹く、もしくは、遠ざける要因はここにはない。狭くて通れないという事実があるだけである。正解となる⑤は、「いかでか」が訳出されていないかのように見えるが、「いかでか」が表す反語の意味(「ない」)が訳されているのは実は⑤だけなのである。

(ウ) 標準

「いかにと言ふ人あへてなし」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いかに／と／言ふ／人／あへて／なし」と単語分けされる「いかに」は、「どのように・どんなに・なぜ」などと訳す副詞。「あへて」は、現代語と同様に「無理に・押し切って・進んで」の意もあるが、打消表現（ここでは「なし」と呼応して「決して〜ない・全く〜ない」の意を表す副詞。「人あへてなし」は「全く人がいない」の意であるから、これが正しいのは①・②の「人は誰もいない」である。

ところで、直前の「童、男を具して板敷きを上りて、内へただ入りに入るに（牛飼の童が、男を連れて板敷きの間の上がって、部屋の奥へどんどん入っていくが）」の続きとして傍線部(ウ)を考えると、ここで「いかに」と人が言うとするれば、それは、室内に入ってきた牛飼と男に対して、「なぜ入って来たのか」「どのような用なのか」といった意味であろう。これは、①の「見とがめる」言葉とは言えるが、②の「面識のある人」を思わせる言葉とは言えない。さらに言うと、文章を読み進めていけば、初めてここへ来た男は当然のこと、神の眷属である牛飼と面識のある人がこの屋敷にいるはずがないことがわかる。よって、正解は①である。「いかにと言ふ人」がどのような人であるかを考えて、意識として正しいものを選ばなければならない。

正解 (ア) 21 (イ) 22 (ウ) 23 ①

問2 文法（格助詞「の」の意味・用法）の問題 標準

波線部 a ~ e の「の」を、意味・用法によって三つに分けると、どのようなになるか。その組合せとして最も適当なものを選べ。

格助詞「の」の主なる意味・用法は次のとおり。

- (i) 主格
直前の語句が主語であることを示す。「が」に置き換えることができる。
例 中將の書きける文は、(中將が書いた手紙は、)
- (ii) 連体格
直前の語句が連体修飾語であることを示す。「の」以外には置き換えにくい。

(iii) 同格

例 中將の父なる人は、(中將の父である人は、)
直前の体言と、後方に出てくる体言(省略されていることもある)が同格であることを示す。
「で」に置き換えることができる。

例 若き僧の黄なる衣着たる人、来て(若い僧で黄色の衣を着ている人が、来て)

※「若き僧」と「黄なる衣着たる人」が同格。

例 若き僧の黄なる衣着たる、来て(若い僧で黄色の衣を着ている僧が、来て)

※「若き僧」と「黄なる衣着たる僧」が同格。「僧」は省略されているが、「たる」が連体形(存続の助動詞「たり」連体形)であるので、体言「僧」を補うと、同格は明らかになる。

※二つ目の例でわかるように、直後に体言を伴わない連体形がある場合、「の」の直前にある体言(例では「僧」)を連体形の後ろに補うことができれば、同格が明らかになることが多い。

(iv) 準体言(順体格) 体言の代わりを務める。「のもの・のこと・の人」等の体言に置き換えることができる。

例 なでしこは、唐のもの、大和のもの、めでたし。(なでしこ「花の名」は、中国のもの、日本のものも、素晴らし
い。)

波線部 a～eを含む箇所と訳は次のとおり。

a 鬼どもの我に唾を吐きかけつるによりて(鬼どもが私に唾を吐きかけたことよって)

b 尊げなる僧出でて、男の傍らに立ちて(尊げな僧が出てきて、男のそばに立って)

c 牛飼の童のいと恐ろしげなる、大きな牛を引きて会ひたり。(牛飼の童でたいそう恐ろしげな童が、大きな牛を引いて男に会った。)

※「恐ろしげなる」は、形容動詞「恐ろしげなり」の連体形。直後に体言がないので、「童・人」等を補うと、「牛飼の童」と「いと恐ろしげなる童・いと恐ろしげなる人」が同格であることが明らかになる。

d 扉の迫の人通るべくもなきより入るとて、男を引きて(扉の間で人が通ることもできない隙間から入るといふことで)

※「なき」は、形容詞「なし」の連体形。直後に体言がないので、「迫・所」等を補うと、「扉の迫」と「人通るべくもなき迫・人通るべくもなき所」が同格であることが明らかになる。

e 童、「ただ入れ」とて男の手を取りて引き入るれば(牛飼の童が、「とにかく入れ」と言って男の手を取って引き入れるので)

以上から、aは主格、bとeは連体格、cとdは同格である。よって、正解は①である。

正解 24 ①

問3 理由説明の問題 基礎

傍線部A「悲しきこと限りなし」とあるが、男がどのように感じた理由として最も適当なものを選べ。

- 傍線部Aの直前にある「その時に、男、心得るやう、『早う、鬼どもの我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそありけれ』と思ふに」は、「その時に、男が、合点して思うには、『なんと、鬼どもが私に唾を吐きかけたことよって、私の体は見えなくなってしまったのであるよ』と思うので」という意味。最後の「に」は、「くするとくしたところ」「くのでくから」「くのにくだが」と訳す接続助詞「に」であるが、ここでは「くのでくから」の訳が当てはまる。つまり、これが理由で男は傍線部Aのように感じたのである。よって、これを正しく説明している④が正解である。

男が鬼に唾をかけられたことは、第一段落の最後に「鬼、四五人ばかりして男に唾を吐きかけつつ皆過ぎぬ（鬼は、四、五人ほどで男に唾を吐きかけては皆通り過ぎて行った）」とあることでわかる。また、男の姿が見えなくなったことは、第二段落に入って、男が帰宅した場面で、「急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず。しかれば、男、『あさまし』と思ひて近く寄りたれども、傍らに人あれども思はず（急いで行って家に入ったが、妻も子も皆、男を見るけれども何も言葉をかけない。また、男が、何か言いかけても、妻子は、返事もしない。そこで、男が、『なんとということだ』と思って（妻子の）近くに寄つ（てみ）たけれども、そばに自分がいるのにいるとも思わない）」と書かれていることや、また、第二段落後半にある「人は我が形をも見ず、声をも聞かず（人は自分の姿を見ることがない、声を聞くこともない）」などからわかる。

- ①は「とくに悪いことをした覚えもない」が誤り。このように男が考えていると書かれている箇所が本文にはない。
 ②の「このままでは死んでしまうと思った」は、本文冒頭の「今は限りなりけり」がこれに相当するが、これは鬼どもに唾を吐きかけられる前に、橋の下に隠れながら思ったことである。「唾をかけられた後でひどく頭が痛く」なって思ったことではなく、傍線部Aには直接つながらない。
 ③は「誰が近くに寄っても」が誤り。「急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず」とあるとおり、その妻子が存在を認知できなくなったのは「男」だけである。

⑤の内容は、第二段落の最終部の「かやうにて夜も明けぬれば、妻子は、我を、『夜前、人に殺されにけるなんめり』と言ひて、嘆き合ひたること限りなし」に相当すると言えるが、妻子が「男は人に殺されたのだ」と考えたのは、夜が明けてからである。傍線部Aの内容は前夜のうちのことであるから、⑤に書かれている内容がその原因となることは考えられない。

正解 25 ④

問4 内容説明の問題 基礎

傍線部B「喜びながら夢を頼みて童の供に行く」とあるが、この時の男の行為の説明として最も適当なものを選べ。

帰宅したが、妻子に自分の存在を認知されなくなったと悟った男(第二段落後半)は、六角堂に参籠して観音に「元に戻してほしい」と祈る(第三段落前半)。すると、十四日ほど経ったある日、夢で「汝、すみやかに、朝ここより罷り出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに従ふべし(お前は、早々に、朝のうちにここから退出して、最初に会った者の言うことに従いなさい)」というお告げを受ける(第三段落後半)。夜が明けて、六角堂から退いた男は、門所で「牛飼の童のいと恐ろしげなる(牛飼の童でたいそう恐ろしげなる者)」に出会う(第四段落最初)。これに続くのが、傍線部Bの直前となる「いざ、かの主、我が供に」と。男、これを聞くに、『我が身は顕れにけり』と思うに、うれしくてであるが、これは、「さあ、あなた、私と一緒に(いらっしやい)」と言う。男は、これを聞くと、『自分の姿が見えるようになった』と思うので、嬉しくて」という意味である。家でも妻子から姿を認知されず、六角堂でも「傍らなる人、知ることなし(そばにいる人は、気がつくこともない)」(第三段落)とあるように、人々に見聞きされることがなかった男は、半月ぶりに牛飼によって我が存在を認めてもらえたのである。だから「我が身は顕れにけり」と喜び、夢のお告げを信じて、お告げどおりに、牛飼に従って、あとについて行こうとしているのである。よって、正解は、このことが正しく説明されている④である。

夢の中に現れた僧(各選択肢共通)が言ったのは、「汝、すみやかに、朝ここより罷り出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに従ふべし(お前は、早々に、朝のうちにここから退出して、最初に会った者の言うことに従いなさい)」であるから、このことについて、①の「六角堂から出てきた人」・「六角堂の門の前で待っている」と、牛飼が出てきた」、②の「元の姿に戻る方法を尋ねるように」、⑤の「牛飼に出会ったら」は、いずれも誤り。

また、男が牛飼に会った時に、牛飼が言ったのは「いざ、かの主、我が供に(さあ、あなた、私と一緒にいらっしやい)」だけであり、男は元に戻れて嬉しいと思いなながらも黙って牛飼について行っている。よって、これについては、①の「夢のお告げの内容を話して一緒に連れて行ってくれるように頼んでみたところ、牛飼が快く引き受けてくれた」、②の「牛飼に相談したところ、すぐれた験者のもとに連れて行ってやろうと言われ」、

③の「怪しげな牛飼だったために不安を抱いた」・「半信半疑ながらも」、⑤の「この牛飼について行けば、きっと妻子と再会することができるだろう」は、いずれも誤り。なお、男は、牛飼が声をかけたことで自分の姿が元に戻ったと思っただけであるから、③は「姿が見えないはずの自分に声をかけてきた」も正確な表現であるとは言えない。

正解 26 ④

問5 内容説明の問題 標準

傍線部C「事のあり様を語りければ」とあるが、その内容として**適当でないもの**を選べ。

適当でないものを選ぶ問題であるので注意しなければならぬが、一方では、五つの選択肢のうち四つは正しい内容なのであるから、選択肢の内容を本文読解の助けにすることもできると考えてほしい。

傍線部Cを含む「男、家に行きて、事のあり様を語りければ、妻、『あさまし』と思ひながら喜びけり」は、「男が、(自分の)家へ帰って、事情を話したところ、妻は、『驚いたことだわ』と思ひながらも(夫の無事な帰宅を)喜んだ」という意味である。つまり、傍線部Cにある「事のあり様」とは、本文冒頭から、男が元の姿に戻って家に帰り着くまでの事情を指しているのである。よって、選択肢の中で、傍線部Cまでの本文内容と合致しないものを探し出せばよいのである。

正解となる④は、「男は尊い存在となり」が本文と合致しない。④の前半が、第五段落最後の「**験者**来たり。病者の傍らに近く居て、心経を読み祈るに、この男、尊きこと限りなし。身の毛いよたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ」に相当しそうだ、これは「験者がやって来た。(僧は)病人のそば近くに座って、般若心経を読み上げて祈ると、この男は、(これを聞いて)この上なく尊く感じた。(その神威に接して)たいそう(体がこわばり)ぞつとして、なんとなく寒いように感じた」という意味である。「身の毛いよたつ」は、現在では「身の毛がよだつ」と言うが、「神仏などの威光や素晴らしいものに接して、または、恐ろしい者や寒さに接して、ぞつとし、体が緊張してこわばり、毛が逆立つように感じられる」の意である。つまり、ここで男は、般若心経の威光に感じ入っているのであって、④にあるように男自身が「尊い存在」となっているわけではないのである。「尊きこと限りなし」は「この上なく尊く感じた」という意味である。また、第六段落で、男の姿が人々の前に現れた時、男の姿は「いとやしげなる」もので、男は家人に捕まっている。このことから見ても男自身が「尊い存在」となっているとは考えられないのである。よって、正解は④である。

なお、④の後半は、第六段落最後の「しかる間、男、頭れぬれば、病者、搔きのこふやうに癒えぬ(そうするうちに、男が、姿を現したところ、

病人は、きれいさつぱりぬぐい取ったかのように快復した」に相当して誤りはない。

①は、問3の解説でも見たとおり、「鬼、四五人ばかりして男に唾を吐きかけつつ皆過ぎぬ」(第一段落)、「急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず。しかれば、男、『あさまし』と思ひて近く寄りたれども、傍らに人あれどもありとも思はず」(第二段落)、「人は我が形をも見ず、声をも聞かず」(第二段落)などに相当して誤りがない。

②は、第三段落冒頭の「さて、日ごろを經るに、せむ方なし。しかれば、男、六角堂に参り籠もりて、『観音、我を助け給へ。年ごろ頼みをかけ奉りて参り候ひつる験には、元のごとく我が身を躰し給へ』と祈念して(そうして、数日が経ったが、どうしようもない。そこで、男は、六角堂に参籠して、『観音様、私をお助け下さい。長年お頼り申し上げて参詣いたしました御利益として、元のように私の姿を見えるようにして下さい』と祈念して)」に相当して誤りがない。「せむ方なし」は「どうしようもない」の意であるが、ここでは「元に戻ることができず、どうしようもない」の意である。また、「しかれば」は、「だから」の意の接続詞。「験(しるし)」は、「御利益・靈験」の意の名詞である。

③は、第五段落冒頭の「童、男を具して板敷きに上りて、内へただ入りに入るに、いかにと言ふ人あへてなし。はるかに奥の方に入りて見れば、姫君、病に悩み煩いて臥したり。跡・枕に女房達居並みてこれをあつかふ(牛飼の童は、男を連れて板張りの間に上がって、部屋の奥へどんどん入っていくが、『何なのだ』と)見とがめる人は誰もいない。ずいぶん奥の方まで入って見ると、姫君が、病に苦しみ煩って寝ていた。(姫君の)足元と枕元に女房たちが並んで座って姫君を看病している)」に相当して誤りがない。「あつかふ」は、古文では、「世話をする・看病する」等の意が重要な動詞である。

⑤は、第六段落の「あさましくて、まつ男を捕へて引き出だしつ(驚いて、すぐに男を捕まえて、引っ張り出した)」と、第七段落冒頭から傍線部C直前の「その時に、験者の言はく、『この男、咎あるべき者にもあらず。六角堂の観音の利益を蒙れる者なり。しかれば、すみやかに許さるべし』と言ひけれ(その時に、祈禱していた僧が言うには、「この男は、とがめられるような罪がある者でもない。六角堂の観音様の御利益をいただいた者である。ですから、すぐに許しておやりなさい」と言った)」に相当して誤りがない。

正解 27 ④

問6 内容説明の問題 標準

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを選べ。(選択肢6個)

本文の前半を読んでいると、牛飼は観音の使いとして、男のもとへやって来たのだろうと思われる。ところが、第五段落の「小さき槌を取らせて、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし（小さき槌を渡して、この病気の姫君のそばに座らせて、頭を打たせたり腰を打たせたりする。その時に、姫君は、頭をもたげて朦朧としてこの上なく苦しむ）」では、牛飼は、自分が取り憑いている姫君を苦しめる手伝いを男にさせている。牛飼は、観音の使者として、直接的に男を助けるために現れたわけではなかったのである。験者が呼ばれ、その験者が読む般若心経を聞くと、牛飼は姿を消し、男の衣が燃え始めて、その姿が露わになる。般若心経によって、男の姿は元に戻ったのである。夢のお告げはここに成就したのであるから、観音は、男を牛飼と出会わせれば、牛飼に連れられて男が病気の姫君のもとへ行くことになり、そうなれば、般若心経を聞くことになって、姿を元に戻すことができると思越していたということなのである。よって、この内容を説明している③が正解である。

①は、「正体を暴いて」が誤り。第六段落には「この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げて外さまに去りぬ（この牛飼の童は、この僧をちよつと見るとすぐに、ひたすら逃げに逃げてどこかへいなくなってしまった）」とあるだけである。問1(ウ)で見たように、屋敷に上がった時、誰一人として牛飼と男を見とがめなかったのであるから、牛飼も男と同様に人々には姿が見えないのである。人に見られることもなく、正体をさらすことなく、牛飼は去って行ったのである。

②は、「男の気配を察して、助けてやろうと不動の火界の呪を唱えたが、加減ができずに」が誤り。験者が男の気配に気づいている様子は本文には全く書かれていない。よって、験者が「助けてやろう」という意図を持って不動の火界の呪を唱えたとは考えられない。第六段落に「僧は不動の火界の呪を讀みて、病者を加持する時に、男の着る物に火付きぬ」とあるとおり、あくまでも験者は姫君の病気を治すために不動の火界の呪を唱えたのである。その結果、男の着物に火がついたのであり、「加減できずに」火をつけてしまったわけでもない。

④は、まず「牛飼を信頼して男を預けた」が誤り。ここまでの解説で見たとおり、牛飼は姫君に取り憑いて苦しめるようなものであり、直接的に男を助けたわけでもない。「信頼して預けた」とは本文のどこにも書かれていないし、そのように考えることも難しい。また、「(観音が)験者の姿となつて現れ」も誤り。験者は、第五段落の「やむごとなき験者を請じに遣はすめり。しばしばかりありて、験者来たり（尊い験者を迎えに行かせたよ）うである。しばらく経って、験者がやって来た）」で登場するが、験者が観音の化身であった様子はなく、本文を最後まで読んでも、そのようなことは全く書かれていない。

⑤は、「元の姿に戻すことと引き替えに」が本文にない。牛飼が男に「姫君の病気を悪化させることを男に手伝わせた」(⑤) ことについては、第五段落に「童、そこに男をあて行きて、小さき槌を取らせて、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし（牛飼の童は、そこに男を連れて行って、小さな槌を渡して、この病気の姫君のそばに座らせて、頭を打たせたり腰を打たせた

りする。その時に、姫君は、頭をもたげて朦朧としてこの上なく苦しむ」とあるだけである。牛飼が男に対して「元の姿に戻すことと引き替えに」という条件を出しているとは書かれていない。そもそも牛飼は、男を自分と同じようなものであると思っているのであろう。男が自分の姿を失ったことで悩んでいることも知らず、それゆえ、元の姿に戻してやろうとも考えていないのである。

⑥は、「やむなく」と「内心では姫君を助けたく思っていた」が誤り。姫君のもとでの牛飼の振舞いが描かれているのは、⑤の解説でも見た「童、そこに男をゐて行きて、小さき槌を取らせて、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし」(第五段落)と、第六段落冒頭の「しかる間、この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げて外さまに去りぬ(そうしている間に、この牛飼の童は、この僧をちよつと見るとすぐに、ひたすら逃げてどこかへいなくなってしまった)」だけである。確かに、最終段落に「かの牛飼は神の眷属にてなむありける。人の語らひによりてこの姫君に憑きて悩ましけるなりけり(例の牛飼の童は神様の従者であったと言う。誰かの頼みによって、この姫君に取り憑いて苦しめていたということである)」とあるので、「指示を受けて、姫君を苦しめていた」(⑥)のではあるが、「やむなく」であったとは書かれておらず、「内心では姫君を助けたく思っていた」も本文中に全く書かれていないことである。

正解

28

③

第4問 漢文 盧文弨『抱經堂文集』

「書き下し文」

荷宇は生まれて十月にして其の母を喪ふ。知有るに及び、即ち時時母を念ひて置かず、弥久しくして弥篤し。其の身の一日として母に事ふる能はざるを哀しむなり。母の言語動作も亦た未だ識る能はざるを哀しむなり。

荷宇は香河の人なり。嘗て南に遊びて反るに、錢唐に至る。母の来前するを夢み、夢中に即ち其の母たるを知るなり。既に覚め、乃ち噉然として以て哭して曰はく、「此れ真に吾が母か。母よ、胡為れぞ我をして今日に至りて乃ち見るを得しむるや。母よ、又た何ぞ我を去ることの速やかなるや。母よ、其れ我をして此を継ぎて見るを得しむべけんや」と。是に於いて夢に見る所に即して之が図を為る。此の図は吾之を見ざるなり。今の図は吾之を見るに、則ち其の母を夢みるの境なるのみ。

余因りて之に語りて曰はく、「夫人人の精誠の感ずる所に、幽明死生の隔て無きは、此れ理の信すべく、誣ひざる者なり。況んや子の親に於ける、其の喘息呼吸も相ひ通じ、本より之を問つる者有る無きをや」と。

「通釈」

張荷宇は生後十カ月で母に死に別れた。ものごころがつくころになると、いつも母のことを思い続けてやむことがなく、(成長するにつれて、母を慕う思ひは) いやましにましていった。自分が(子として) 一日も母につかえ(て孝行す) ることができないことを悲しく思ったのである。(また) 母の話しぶりや身ぶりもまったく(記憶にもなく) 知ることができないことも悲しかったのである。

荷宇は香河県の人である。かつて遠く南方の地を訪ねての帰路、錢唐県に投宿したことがあった。(その夜) 母が目の前にやってくる夢を見、夢の中ですぐにそれが母であることがわかった。やがて目がさめて、そこで大声をあげて泣いて言った、「これはほんとうに私のお母様ですか。お母様、なぜ今日になって私に会ってくださったのですか。お母様、またどうしてあんなに早く私の前からいなくなってしまうのですか。お母様、私にずっとこのままお姿を見続けさせてくださることはできないのですか」と。そこで、夢で見た母の姿のままに母の絵を描いた。この(その時荷宇が描いた母の) 絵は、私はそのものを見てはいない。今荷宇が持ってきた絵は、私が見たところ、荷宇が母の夢を見る場面が描かれているだけである。

私はそこで荷宇に語って言った、「そもそも人間のまごころが人に通じること、あの世とこの世の隔てが無いのは、道理として信すべくいつわりのないことである。まして子と親とは、その息づかいまで通じ合い、言うまでもなく間を隔てるものもなく固く結ばれているものである」と。

【解説】

問1 語の意味の問題 (1) 標準 (2) 基礎

波線部(1)「有^レ知」・(2)「遊」のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

問1は、二〇一四年度、二〇一五年度に続いて、「語の意味の問題」であった。

(1)「有^レ知」は、生後十カ月で母を亡くした荷宇が、「知有るに及び、即ち時時母を念^{おも}ひて置かず」という文脈にある。ここは、「知」や「有」の知識の問題ではなく、文脈上最も適当なものはどれかという判断の問題である。とはいえ、「知有る」の語義を考えれば、②「教育を受ける」、③「うわさを聞く」はそぐわない。

①「世に知られる」は、荷宇がそのような人物であるかどうかの判断が本文からはできない。

④「知り合いができる」は、知り合いができるようになったところで、それが亡母を慕うこととつながらない。知り合いから亡き母のことを聞いて、と考えるのはあくまで類推であり、本文にない。

正解は、⑤「ものごころがつく」である。「知有るに及び」で、「知恵があるよう(な年齢)になって」というのが直訳である。

(2)「遊」は、漢文の学習上は、知識の問題である。「遊ぶ」は、むろん、「ぶらぶらする」とか、「気ままに歩きまわる」「好きなことをして楽しむ」という意味はあるが、「遠出をする。旅をする。諸方をめぐるとか、「諸方をめぐって説く。遊説してまわる」「修学や仕官のため家をはなれて他郷へ行く」という意味が大切である。

ここでも、北方の香河(注1||今の北京の東)の人であった荷宇が、「南に遊び」て、銭唐(注2||今の杭州。香河からは千キロメートルあまり離れる)に行ったとあるから、正解は④「故郷を離れ遠方の地を訪ねて」である。

- 正解 (1) 29 (5) (2) 30 (4)

問2 二つの「すなはち」の意味の判断の問題 基礎

二重傍線部(ア)「即」・(イ)「乃」はここではそれぞれどのような意味か。その組合せとして最も適当なものを一つ選べ。

(ア)「即」・(イ)「乃」とともに、読み方は「すなはち」である。「すなはち」と読む字は、他にも「則」(本文中にあり)や「便」「輒」などがある。いろいろな使い方をしているが、基本的には、次のような意である。

則……「レバ則ち」の形で用いることが多く、古文の「已然形+ば」(する)と「に相当する」。

乃……そこで。そして。

即……すぐに。そのまま。とりもなおさず。

便……たやすく。すぐに。そのまま。

輒……～するたびごとに。いつも。

この基本的な意味どおりの答になっているので、知識があった人にとってはたいへん簡単な問題であるが、用いられている文脈を考えても、(ア)は、母がやってきた夢を見て、夢の中でも「即ち(＝すぐに)其の母たるを知る」、(イ)は、やがて目がさめて、「乃ち(＝そこで)噉然として以て哭して(＝大声をあげて泣いて)」と、「すぐに」「そこで」があてはまっていると言える。

正解 31 ①

問3 傍線部の解釈の問題 標準

傍線部A「時時念^{おも}母不置」の解釈として最も適当なものを一つ選べ。

「時時母を念^{おも}ひて置かず」には、とくに句法上のポイントもなく、かえって判断が難しい。

「母を念^{おも}ひて」については、どの選択肢も大きく違っていないが、「念^{おも}ひて」であるから、ここを「思いながらも」と逆接に訳している⑤は、違和感がある。

「時時」は、「ときどき」、あるいは、「その時その時に。いつも。つねに」の意。前者であれば日本語の現代語と同じであるが、後者の意がわかるかどうかの方が大事である。前者なら③、後者なら①・⑤が正しい。

「置かず」の「置く」は、ここでは、「筆を置く」「箸^{はし}を置く」などのような、「途中でやめる。中断する」という意味で、「置かず」で「やめない」の意。やや難しいが、②「心を慰める」、③「いたたまれなくなる」、④「もの思いにふける」、⑤「言わない」のいずれであっても、「置かず」の語義にあてはまらない。正解は①。

正解 32 ①

問4 返り点の付け方と書き下し文の組合せの問題 標準

傍線部B「哀其身不能一日事乎母也」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを一つ選べ。

大きな句法上のポイントはないが、「能」は「不能」という形になっていれば、「あたはず」である。「能くす」というサ変動詞にして「よくせず」と読むことは、なくはないが、①・③と②・④・⑤の2対3の配分で「あたはず」の読みもあるのだから、「あたはず」のほうが正しいであろうと考えたい。

ただ、「能くせず」も×と即断はできないので、各選択肢の読み方を直訳して、意味が成り立つかどうか、前後の文脈にあてはまるかどうかを考えてみよう。

- ①は、「自分自身を悲しみ、一日のことを母にできないのである」。意味が通らない。
- ②は、「自分自身を悲しみ、一日も母につかえることができないのである」。これも、冒頭の「自分自身を悲しみ」がよくわからない。
- ③は、「自分自身の一日のことを、母にできないのを悲しく思うのである」。母に「できない」「自分自身の一日のこと」が何のことか、わからない。
- ④は、「自分自身が、一日も母につかえることができないのを悲しく思うのである」。母はもう亡くなっているのであるから、母につかえたい(親孝行したい)と思ってもできないのが悲しい、ということである。これが正解。
- ⑤は、「自分自身が、一日もつかえることができないのを、母に悲しむのである」。④に比べて「母に」の位置がおかしい。

ちなみに、この設問形式はセンター漢文では頻出する形であるが、返り点の付け方のチェックは時間の無駄である。文の構成上どのように返るのは問題があるというようなことはあるのであるが、ひとまず書き下し文に示した読み方どおりに返り点はついていて、大事なのは、傍線部中に何か句法上のポイントがないかということと、そのように読んだときの文意が通るのか、文脈にあてはまるのかの判断である。

正解 33 ④

問5 傍線部の解釈の問題

標準

傍線部C「母、胡為乎使_下我至今_三日乃得_レ見也」の解釈として最も適当なものを一つ選べ。

「母よ、胡^{なんす}為れぞ我をして今日に至りて乃^{すなは}ち見るを得しむるや」には、「胡為れぞ…連体形十や」の疑問形と、「…をして…しむ」の使役形の、二つの句法上のポイントがある。こまかいが、「得_う」は可能である。

選択肢を見ると、「お母様、なぜ今日になって…たのですか」はすべて共通している。「母よ、胡為れぞ…今日に至りて…や」の部分に相当する。

疑問形、使役形の句法のポイントに留意して、傍線部を直訳してみると、「お母様、なぜ私に今日になって（あなたを）見ることを可能にさせてくださいのですか」となる。「見ることを可能にさせた」というのは、具体的には、「夢の中にあらわれて、会ってくれた」ということである。よって、

正解は④。

正解 34 ④

問6 二つの「図」の違いの判断の問題 応用

傍線部D「比_図」と、実際に見たE「今之_図」とは、どのように異なっているか。その説明として最も適当なものを一つ選べ。

選択肢前半のDの説明にも、後半のEの説明にも、それぞれ、2対2対1の配分がある。

Dの説明では、①・②が「荷宇が母の夢を見る場面」

③・④が「荷宇の夢に現れた母の姿」

⑤が「荷宇が夢を見た土地の風景」

Eの説明では、①・④が「荷宇が夢を見た土地の風景」

②・⑤が「荷宇の夢に現れた母の姿」

③が「荷宇が母の夢を見る場面」

さて、Dの「此の図」は、筆者は「吾之を見ざるなり」、つまり見ていないのであるが、「此の」が指し示す内容は直前部の、「夢に見る所に即して之が図を為」った、つまり、荷宇が夢で見たとおりに描いた母の絵である。Dは、③・④が正しい。

一方、Eの「今の図」は、「吾之を見る」、つまり筆者が見た絵なのであるが、それは、「其の母を夢みるの境なるのみ」、つまり、荷宇が母の夢を見ている様子を描いただけのものであったのである。Eは、③のみが正しい。

正解 35 ③

問7 第三段落の内容合致問題 応用

傍線部F「余因語之曰」以下についての説明として最も適当なものを一つ選べ。

傍線部F「余因語之曰」以下の、「余」は筆者の言葉の内容を解釈しなくてはならないのであるが、選択肢の冒頭にある配分に注目したい。

①・③・⑤は、「まことの心は生死をも超えて相手に通じるものであり、まして」

②・④は、「まことの心は生死をも超えて相手に通じるとはいえ、やはり」

これは、①・③・⑤でなくてはならない。「内」の二つめの文の頭に「況んや」があるからである。「A、況んやBをや」で、「Aである（のだから）、ましてBであればなおさらである」という解釈をする抑揚形がある。このように、解釈問題ではないが、内容説明問題で、何らかの句法上のポイントが選択肢の中に生かされているというケースは多い。

「夫れ人の精誠の感ずる所に、幽明死生の隔て無きは、此れ理の信ずべく、誣ひざる者なり」が、「(人の)まことの心は生死を超えて相手に通じるものである」ということを言っている。

「況んや子の親に於ける、其の喘息呼吸も相ひ通じ、本より之を問つる者有る無きをや」は、「まして子と親は、その息づかいまで通じ合い、言うまでもなく問をへだてるものがない」ということで、これは、⑤の「まして子は親と固く結ばれている」が合致する。①の「まして親が我が子を見捨てるはずがない」、③の「まして親が我が子から離れることはない」でもよさそうであるが、現実には、荷宇の母は十カ月の子を残して亡くなっている。選択肢後半も、ものごころついたところからずっと母のことを思慕し続けた荷宇の「思いが届いた」ことを言っている⑤が適当である。①のように「夢の神秘を分析し」てはいないし、③のように「母の愛情を評価」してもいいない。

正解 36 ⑤